

季刊

BEST DOCTORS IN JAPAN™

第33号 2016年 4月

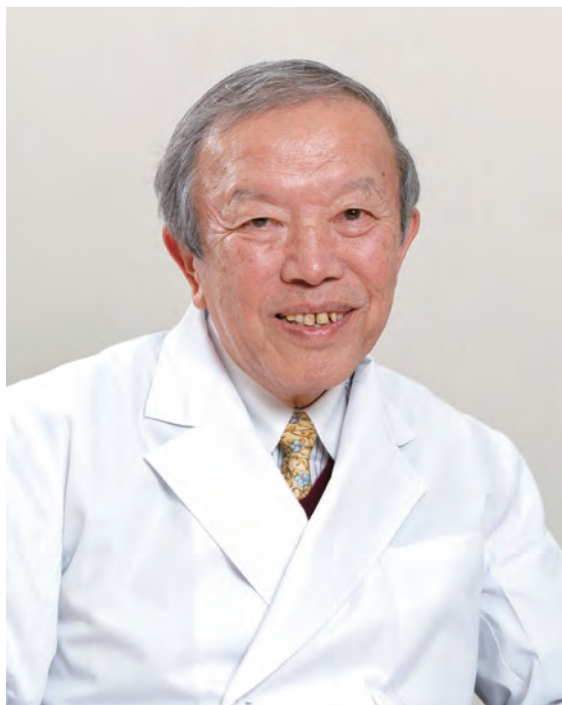
今月の
ベストドクター

順天堂大学医学部名誉教授

水野 美邦

パーキンソン病患者さんのQOL向上を目指して

パーキンソン病の世界的権威、水野美邦先生。先生の著書を多くの医学生たちが神経内科の教科書として使用する。先生個人の歴史が、すなわち日本の神経内科の歴史といっても過言ではない。神経内科のフロンティアとしての足跡を伺った。



順天堂大学医学部名誉教授

水野 美邦 みずの・よしくに

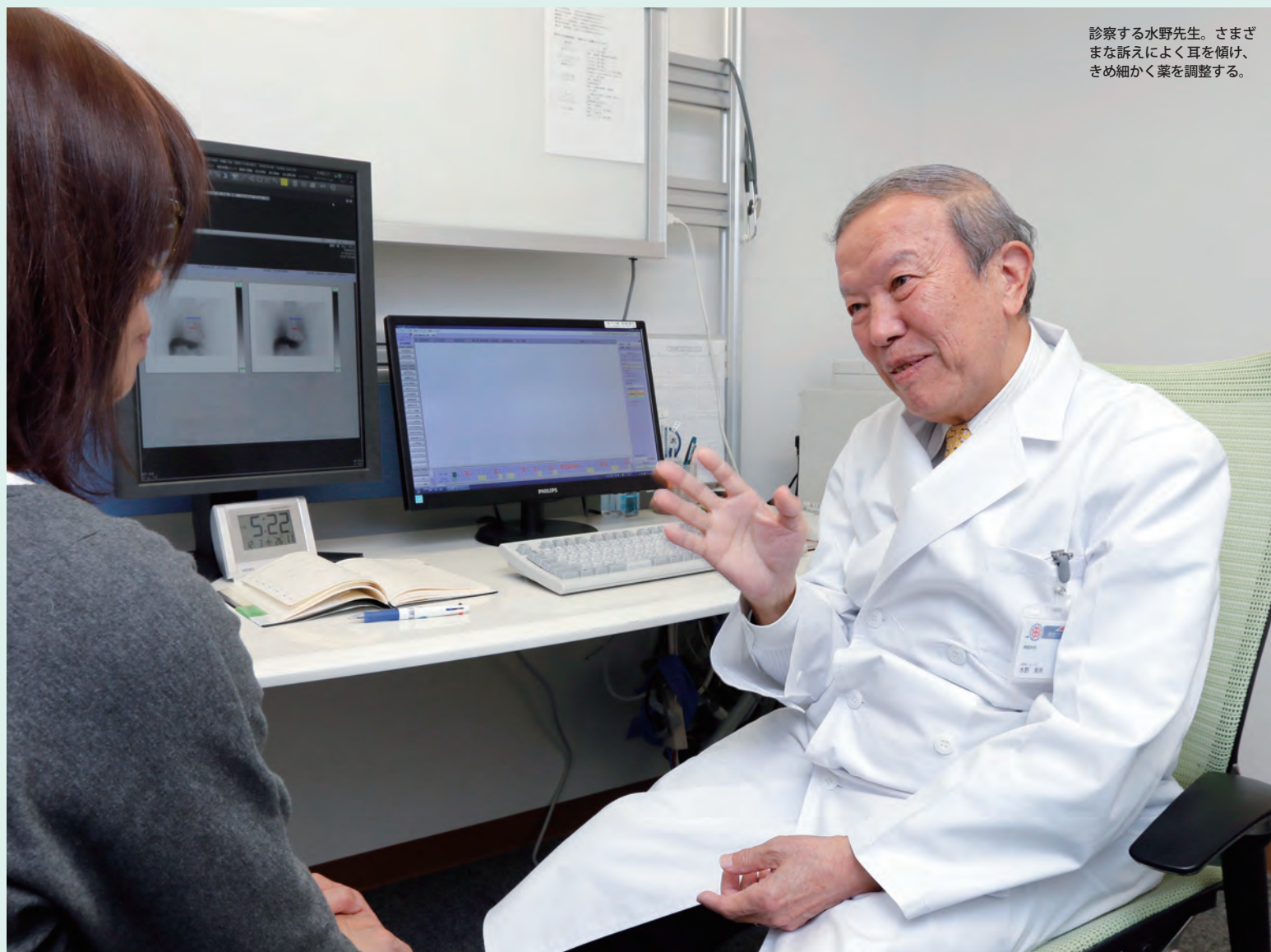
1965年東京大学医学部卒。同大医学部第三内科で内科研修後、神経内科入局。69年ノースウエスタン大学医学部神経学レジデント。自治医科大学神経内科講師、助教授、教授を経て、89年より順天堂大学医学部神経学講座教授。2007年同大医学部附属順天堂越谷病院院長就任。日本の神経内科医のパイオニアであり、パーキンソン病の世界的権威。臨床や教育、学会活動、患者の会などに幅広く貢献し、今も患者に向き合い、患者に学ぶ姿勢で臨床に携わる。現在、東京クリニック、順天堂大学医学部附属順天堂医院、新百合ヶ丘総合病院、銀座内科・神経内科クリニックで診察を行っている。

神経学的診察から疾患を絞り込む

「何かつらい症状や、生活でお困りのことはありませんか」。水野先生が穏やかに患者さんに語りかけ、診察が始まる。どこまでも優しい眼差しと柔和な物腰に、患者さんの不安が徐々に取り除かれていくようだ。先生の診察が進む。頭のとっぺんから足のつま先まで、患者さんの反応一つひとつに集中する。動き、音、触れた感触。少しの兆候も見逃すまいと、観察眼は鋭い。

人間の最も繊細な部分ともいえる神経の異変をつかまえる、それが神経内科医の仕事だ――。

約50年前、医学生だった水野先生に神経内科への関心と呼び覚ましたのは、丁寧で綿密な神経学的診察だった。当時、内科から独立したばかりの東京大学医学部神経内科で初代教授を務めた豊倉康夫先生とよくらやす おの、症状を詳しく診て、責任病巣を推測し、観察から鑑別診断を経て病気を特定するプロセスは実に論理的だった。これから医師として臨床の現場に出ようとする若き日の水野先生は、大いに刺激を受けた。「神経病理



を専門にしていた豊倉先生は、しっかりとした基礎の上に推論を展開していました。MRIもCTもない時代。立派な先生でした」。恩師を懐かしむが、その臨床姿勢は水野先生に引き継がれている。

神経内科が対象とする症状は、頭痛、めまい、しびれ、物忘れ、物が二重に見える、ろれつが回らない、物が上手に飲み込めずにむせる、手足を動かしにくい、力が入らない、体の震え、ふらつくなど実に多様だ。そうした症状から、脳、脊髄、末梢神経、筋肉に及ぶさまざまな疾患を診断し、治療する。「神経内科の臨床には膨大な病気の知識と情報が必要です」と水野先生は語る。

適切な治療とリハビリで 天寿を全うできる

社会の高齢化と相まって、アルツハイマー型認知症をはじめとした神経難病を抱える患者数は増加している。水野先生が専門とするパーキンソン病も例外では

なく、日本には約18万人の患者さんがいるといわれる。

「パーキンソン病は進行性の病気ですが、転んで骨折さえしなければ、歩けなくなることはありません。神経変性疾患の中では唯一治療法がある疾患で、薬を使ってよくすることができる。そこにやりがいを感じます」と水野先生は話す。パーキンソン病になっても、適切な治療やリハビリテーションを行えば、患者さんは十分に生活を楽しみ、天寿を全うできるという。

パーキンソン病は、体の片側の震え（^{しんせん}振戦）、歩行障害、手の動作障害から発症する。いずれ両側に症状が現われ、うつや認知症など精神症状を伴う場合もある。中脳には黒質という組織があり、その神経細胞からはドパミンという神経伝達物質が分泌されている。ドパミンは、神経細胞同士で情報が円滑に伝達されるためのオイルのような働きを担うが、パーキンソン病は黒質の異常によってドパミン神経細胞が減少し、ドパミンの分泌量が低下してしまうために、前述のさまざまな症状が引き起こされる。



神経学的診察で行われる検査の一部。(左) 患者さんの頭部に手を当てて軽く動かし、筋力をチェックする。
(右上) ハンマーで肘の腱に刺激を与え、反射異常の有無を確認する。
(右下) 音叉を内くるぶしに当て、振動の感覚の有無を確認する。

きめ細かな コントロールが必要

このように、症状のメカニズムは分かっているものの、ドパミン神経細胞が減少してしまう原因は解明されていない。そのため、パーキンソン病を根本的に治す治療法はいまだなく、薬物療法を中心とした対症療法が行われる。L-ドーパ、ドパミンアゴニスト、COMT阻害薬、MAO-B阻害薬、アマンタジン類、抗コリン薬、抗てんかん薬など、症状が多様なだけに、各症状に応じて使用される薬の種類も多い。また作用が拮抗する薬も少なくないため、副作用の悩みもある。発症年齢によっても薬の選択は変わってくる。

「パーキンソン病は、発症して5年ほどは誰が治療してもスムーズに改善します。しかしそれを過ぎると、ウェアリングオフ^{*1}やジスキネジア^{*2}など、厄介な現象が起こり始めます。そこで、進行に応じて薬の種類を変えたり、量を加減したり、回数を増やしたり、補

助的な薬を減らしていくなど、きめ細かくいろいろな工夫をする必要があります」。20～30年という長い経過をたどるだけに、まさしく「さじ加減ひとつ」で患者さんの症状は左右される。

しかしながら、パーキンソン病の専門医は別にして、実際の臨床では、なかなかそこまで薬を的確に使いこなせる医師が少ないのが現実、と水野先生は指摘する。「僕は、患者さんの会の活動にもできるだけ参加しています。北は函館から南は宮崎まで、日本中のあちこちに行きました。患者さんの会では、講演をした後で患者さんとの個人面談の時間を設けています。そこで知なのですが、発症して10年以上経っているのに服薬が1日3回のままだったり、薬が効きにくくなっている、のむタイミングを変えてみるべきなのに相変わらず同じ時間に服用していたり、思うように症状をコントロールできていない患者さんが意外に多いんです。じっくり患者さんと向き合って薬を調整する時間を、医師が取れないのかもしれないですね」と、水野



神経学的検査で使われる道具。

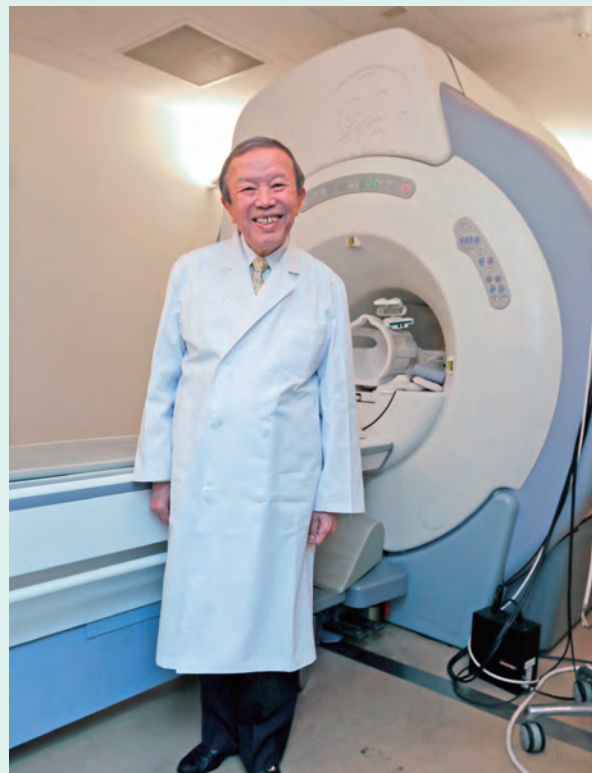
先生の表情が少し陰る。加えて、神経内科は扱う疾患が幅広い。全ての疾患の詳細に通じる医師は、残念ながら少ないのだろう。そんなとき、以前は個人面談の内容によって、担当医に手紙を書いたり、患者さんに直接薬ののみ方を指導したこともあったという。しかし、最近あることを決意した。「本を書こうと思っています。僕の数十年間の経験を生かし、出会ってきた患者さんたちに対する薬の処方や指導を振り返り、僕ならこう治療する、というものを一冊にまとめるつもりです。今はまだ原稿を書く前の準備段階ですが、今年はこれにも力を入れたい」と語る。

神経内科の歴史を作り、切り拓く

水野先生は医学部を卒業後、誕生したての神経内科に進み、まだ専門家も少ない新しい分野を開拓する道を選んだ。医学生・研修医の頃から海外の医学記事を読み、アメリカの臨床家の診断の的確さに感心し、そこで学びたいと海を渡った。「留学先のシカゴのノースウェスタン大学のレジデント生活はとても充実していました。そこで指導を受けたドクターも、豊倉先生のようにしっかりした神経内科的診察を行う人でした」。ちょうどこのころ、アメリカではパーキンソン病に対するL-ドーパの治療が始まっていた。「患者さんがよくなっていくその劇的な効果には本当に驚きと感銘を受けました。これは面白いと、パーキンソン病の研究に入り、ここまで来たというわけです」

帰国後すぐに籍を置いた自治医大時代には、パーキンソン病へのMPTP（神経毒の一つ）の関与を解明した。順天堂大時代には、多くが関心を寄せる前にパーキンソン症状とミトコンドリア障害との関連を示した。さらに家族性パーキンソン病の原因遺伝子Park2の発見、ミトコンドリア関連蛋白をコードする遺伝子の同定など、まさにパーキンソン病研究一筋、世界的権威の名にふさわしい研究の軌跡だ。神経内科の第一線で現在活躍している多くの後進も育てている。研究者として、教育者として、そしてもちろん臨床医として、パーキンソン病とその患者さんたちとともに歩んできた。

数々の学会、患者関連のコングレス開催への寄与も大きく「世界中の専門医が集まってくれたこと、患者さんの会が続いていることはうれしい」と、水野先生本人にも忘れ難い思い出となっている。日本で初のAsian and Oceanian Parkinson's Disease and Movement Disorders Congress、アジアで初めて開催された国際



MRI機器の前に立つ水野先生。問診と神経学的検査でほとんど診断がつくが、似た症状を示す別の病気と区別するために、血液検査や画像検査を行う場合があるという。



2001年に香港で行われた「Asian and Pacific Parkinson's Disease Association」で講演する水野先生。現在も「全国パーキンソン病友の会」の活動のため、年に6〜7回ほど地方を訪れ、講演や患者さんとの面談を行っている。

Movement Disorder Society Congress、パーキンソン病・運動障害疾患コンgresなど、「新しい分野を切り拓く」という初志のもと、日本の神経内科を力強く牽引してきた証は、今も歴史を刻んでいる。

患者さんとの長い共同作業

パーキンソン病治療・研究のフロンティアとして走り続けてきた水野先生から「大学を辞めてから分かったこともあるんですよ」という意外な言葉が出た。「例えば、パーキンソン病の患者さんは家の中が危険で、むしろ外のほうが上手に歩けるだとか、両手がふさ

がっていると足元に対する意識がおろそかになりがちだとか……。長く患者さんを診ていないと気付かないこともあります」。臨床の奥の深さが伺えるエピソードだ。

パーキンソン病の治療は、患者さんとの長い共同作業で、いかにハッピーな状態にしてあげるかが医師の役割だが、患者さん自身が活動的に生活を楽しもうとすることも必要という。「例えば、奥さまと診察室にいらっしゃった患者さんがいたら、僕はよく言うんです。あなたは確かに病気になったけれど、世話してもらっただけではなくて、たまには奥さまを喜ばせなくちゃいけないよ、と。リハビリに行く。調子がいよいときには、散歩に行く。奥さまを連れて食事に出かける。旅行に行くのもいいですよ」と積極的な外出を勧める。

「歩く」という運動機能の維持が患者さんのQOL（生活の質）と自立を大きく支える。「そのためには転ばないことが大切です。転んで骨折したら寝たきりになって

しまう。それは絶対に避けなくてはならない。だから、10分程度の歩く練習を日課にしてもらいます」。転ばないためには、常にかかとから足を出す歩き方を意識する。健康な人は無意識にできていることでも、パーキンソン病の患者さんは、ついすり足になってしまい、転倒のリスクが高くなるのだという。

このほかにも、病気が長くなると、患者さんからはいろいろな訴えが出る。眠れない、夜のトイレの回数が多い、昼間眠い、腰が痛い……。 「大切なことは、それがパーキンソン病による症状なのか、合併症なのかを見極めること。それが判断できれば、自ずと打つ手（薬の種類や量などの変更）が決まります。とはい

え、なかなかきれいに症状が消えてくれないことも少なくない。患者さんがどの症状が一番つらくて、なくしたいと思っているか、患者さんの話をよく聴く。コミュニケーションが大切です」と水野先生。名医の条件を問うと、「いろいろな訴えの原因を見抜き、その場で親切に説明できること。合併症であれば、必要な検査を適切にオーダーすることに尽きるかな」と笑った。

患者さんに 寄り添い続ける臨床

家族を思いやるように患者さんに助言する水野先生は、ご自身も奥さまを大切にしている。「できるだけ仲よくするのが一番。年に一度は一緒に海外へ行くようにしています」。一昨年は金婚式を記念して、タヒチに旅行した。「学会抜きの久々の海外旅行。のんび

りできました」と、優しい眼差しの目尻が一段と下がる。趣味は音楽。「一度はメサイヤを歌ってみたい」と、週末は教会に通い、聖歌隊で歌っている。

最後に、パーキンソン病治療の将来について伺った。現在、パーキンソン病の原因に近づく研究が一層進み、 α -シヌクレインという蛋白質の凝集を、抗体によって取り除く薬の臨床研究が始まっているという。また動物実験のレベルでは、関連するRNAの産生を抑制する薬なども研究されている。「もし病気の進行を遅らせる薬や治療ができれば、本当の意味で早期診断が有用となるでしょうね」

そうした新たな治療の登場に大きな期待を寄せつつ、水野先生は臨床医として、今日も病気とともに生きる患者さんに寄り添い続けている。■



(右上) パーキンソン病治療・研究の第一人者としての長年の功績により、平成26年に受賞した瑞宝中授章。
(下) ご自宅の書斎で寛ぐ水野先生。現在、「パーキンソン病はこう治療する」という本の執筆を準備している。

日本におけるベストドクターズ・サービスはBest Doctors, Inc.ならびに同社の日本総代理店である株式会社法研により運営されています。

● ベストドクターズ社について

ベストドクターズ社（本社：米国マサチューセッツ州ボストン）はハーバード大学医学部の教授2名により、「病に苦しむ方々が最良の医療を享受できるように」との理念の下、1989年に創業しました。弊社は現在、本社のある北米をはじめ、中南米、ヨーロッパ、オセアニア各国で事業を展開。日本には2002年に進出し、重篤な疾患で苦しむ方々への「ベストな医師＝Best Doctors in Japan™」のご照会を柱に活動しています。



● 株式会社法研について

法研は1946年に設立され、社会保障の情報発信事業を起点にその領域を拡大し、健康・医療・社会保障をはじめ、年金・介護・福祉など幅広い分野で良質な情報・サービスを提供してまいりました。永年にわたり培われた信頼と実績をもとに、みなさまの「健康寿命」の延伸と「クオリティ・オブ・ライフ（生活の質）」の向上を積極的に支援しています。



ベストドクターズ記念楕

ご選出記念楕へのお問い合わせを多々たまわり、誠にありがとうございます。予想を超えるご反響をいただき個別のご案内が難しい状況のため、本誌にて概要をご案内させていただき運びとなりました。

お問い合わせ、ご購入につきましては、お手数ですが、下記メールアドレス宛にご連絡ください。折り返しご案内をお送り申し上げます。なお、記念楕は過去の年度（2012-2013、2010-2011、2008-2009、2006-2007）のものも別途お承り可能です。

【仕様】木目調枠 縦約33cm×横約28cm 重さ約1kg 【価格】2万8,000円※（送料・税込）

【納期】お申し込み後8週間程度

※氏名欄に記載する肩書き、学位は「Dr.」「M.D.」「M.D., Ph.D.」等からご選択いただけます。

e-mail : bd-tate@bestdoctors.jp (bestdoctorsには末尾に「s」がつきます)



※原価高騰に伴い、平成28年4月1日受注分より2万8,000円（送料・税込）に価格改定いたしました。



Best Doctors, Inc. (ベストドクターズ米国本社)
60 State Street, Suite 600, Boston, MA 02109 USA
Tel: +1(617)226-3666

ベストドクターズ社（Best Doctors, Inc.）は、1989年にハーバード大学所属の2名の臨床医によって設立されました。今日では、世界30カ国、3000万人以上の方々に、おもに生命保険会社、損害保険会社、企業等を通じてご加入いただいております。

Best Doctors、star-in-cross ロゴ、ベストドクターズ、Best Doctors in Japan は米国およびその他の国における Best Doctors, Inc. の商標です。

本誌は著作権法上の保護を受けています。本誌の一部あるいは全部について、株式会社法研および Best Doctors, Inc. から文書による許諾を得ずに、いかなる方法においても無断で複写、複製、転載することは禁じられています。

ベストドクターズ社日本総代理店 株式会社 法研
〒104-8104 東京都中央区銀座1-10-1 Tel.03(3562)8404